

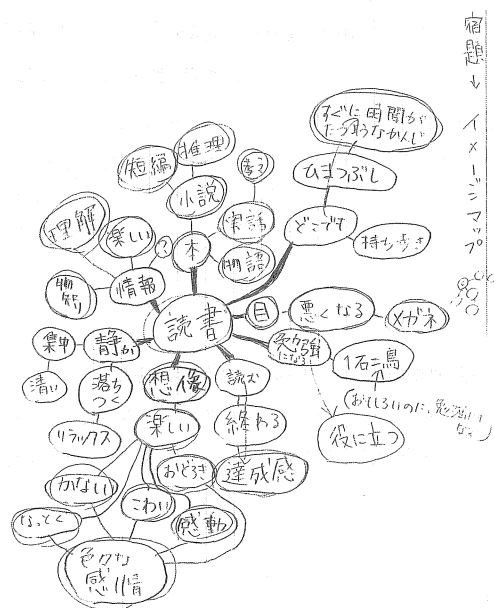
学び合いの中で個の読みを高め、深めていく子ども

— 中学1年「読書生活」を築く国語学習活動を通して —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

年度当初、中学校での国語学習の始まりに当たって、生徒たちのこれまでの読書経験や普段の読書の様子を確認するため、読書についてのイメージマップづくりを行った。また、このイメージマップをもとに、今後の読書に関する学習の構えとして、生徒それぞれが読書の意義について考え、書きまとめておくことも行った。



「読書」のイメージマップ (生徒A)

毎朝行っている10分間の朝読書や国語の授業で取り組んでいる読書記録などにより、生徒の読書に接する機会は定着してきている。読書活動に費やす時間がある程度確保できている中で、生徒のこれまでの読書体験の傾向を探ると、読む本（マンガ、雑誌を除く）の多くは推理小説やケータイ小説、映画化またはゲーム化されたものが主になっている。平易な文章の作品には興味を示すが、工夫された構成や巧みな表現をもつ文章にはあまり親しみを感じていないのが実状である。このような状況ではあるが、生徒一人ひとりの読書生活、趣向、関心から読書課題を設定していくことで、共通した読書経験を語り合い、読書を通じての交流へとつなげることができ、読書のジャンルを広げることができると考えている。

生徒は読書の時間を設けると、積極的に読書活動に取り組む。自分なりのペースで読みすすめ、読書を楽しもうとしている。しかし、テレビドラマ、映画、「ケータイ」とメディア化された作品を手にする傾向は強く、発展的に自分の読書分野を広げようと活動したり、自主的に自分たちの課題をもって読書に取り組もうとするには至っていない。また、中学生としてどんな読書を読んだら良いのかわからず、これまでの読書の傾向を抜け出せずにいる生徒も多いようだ。そのため、教師の提供する本に関する情報には興味を示し、他の者がどのような読書に取り組んでいるのかについても知ろうとする意欲がある。しかし、自らの考えや思いを伝え合うことの意義を意識しながらも、実際に表現する場には慣れていない生徒が多く、読書生活を築いていくためには、自らの読書を確認し、他の読みも取り入れていく機会の設定が大切であると考え、本単元を設定した。

ぼくの思う読書の意義は、自分の知らないことが分かったり、次はどんなのか想像して楽しめたり、読解力がついたり、生活のうえでとても役立つことだと思います。例えば、「坂本龍馬・この人を見よ！歴史をつくった人びと伝・プロジェクト 新・偉人伝」にのっていた龍馬の言葉に「事は十中八九まで、自らこれを行い、残り一、二を他にゆずりて、功をなさしむべし」というものがあり、この意味は、仕事はすべて自分でやらず、八分まで自分でやったら、最後は他の人にゆずってしまうぐらいの気持ちがないと成功はしないよ、という意味です。この言葉を知ったとき、正直、びっくりしました。ぼくはいつも仕事を全部やらないといけなかったからです。龍馬はぼくとはちがう考えをもって、ぼくはこんな考えもあるのか、と思いました。龍馬のような考えをもっている人がいるということを知り、ぼくもこの言葉を実感するときかえるのだろうかと思いました。

作文「読書の意義」(生徒B)

(2) 本単元の目標や内容と国語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園国語科では、「読む力を高めるといことは、情報を正確に取り出したり、文章を肯定的にとらえて理解するだけでなく、文章の内容や筆者の意図などを解釈することが必要」ととらえている。

国語科で考える思考力・判断力は読む活動における読解と一致するところが大きく、また、この読解の力は解釈力とも置き換えられるだろう。自分の解釈を話す、または、書くという表現活動に移し、表現することは、表現力を磨き、より多くの情報や意見を取り入れる手だてともなる。多くの情報を引き出し、整理しながら、自身の自由な発想と合わせて話し、書いていく力が表現力と一致するところが大きい。

読書活動がその本の筆者・作者の考えや思いを取り入れる活動にとどまっていたら、充実した読書活動とは言えない。他の考えや思いを自分自身の思考に生かそうとする学びの姿勢を築くものであったり、共同して文章を読み解く活動へと広げることで、さらに多くの他の思考を取り入れ、判断したうえで、自分の表現に生かしていくことができ、主体的な学びが築かれることが期待できる。

問題解決のための思考や判断を「話すこと」や「書くこと」といった表現活動で可視化し、自分が読み取ったことを、他により効果的・正確に伝えようとする力が、より深い個の読みにつながると考える。この読みの深まりにつながる表現力を国語学習でつけていくことで、他の教科学習活動の中で行われる生徒の表現活動の基盤を作り上げることになるととらえている。

本学年では、これまでの読書分野に通じる教材の学習の際に、読書へのアニメーション（読書内容によるクイズや対話ゲームなどの作戦）の手法を取り入れた学習活動をいくつか行ってきた。本をじっと独りで黙読し、読み浸る時間とは対比的に、本の内容を他とかかわることで楽しみ、本の世界に親しみをもち試みである。本単元でも、本の内容、文章表現について語ることで、お互いを知り、交流を通してより深く広がりのある読書活動へと発展させたいと考えた。また、小集団（3または4人のグループ）で情報交換し、お互いアイデアを出し合って、より良いものを創ろうとする話し合いの場をもつことができるよう工夫し、自身の読書をふりかえることや、より人を惹きつける情報とその提供方法を探り、相手意識をもたせた表現の充実にもつなげる活動を考えた。学習者同士が読書に関する共通の話題でかわりをもつことで、本の世界を広げ、読書生活を発展させるきっかけをつくっていくことが、さまざまな学習場面における「学び合い」の基礎づくりにつながるのではないだろうか。

本単元では、まず自分で読み解いた本の世界を、本文中の表現にこだわりをもちながら他に効果的に伝えることができるようにする。さらに、個別の読みを他に向けて表現したり、他の読みの意見にふれることを通して、読みを広げ、深めることをねらいとしている。つまり、他の思考を探り、自分の思考も取り入れて、さらに多くの他へと伝え、読みを発展させていくことをめざしているのである。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

読書生活者を育む国語学習として、本学校園初等部前期では、本を読める環境を整えることに重点をおいている。保育における読み聞かせの活動を受けて、小学1年では「どのおはなしをしってる？」（挿し絵を見て、児童が既知の本を確認し、教師がその本を読む学習）へとつなげるなど、身近な読書体験の確認を行っている。また、テーマの共通する本を児童たちが選んで読んでいく活動や長期の休みの前後に取り組んだ読書を中心に、児童がお互いの読書を紹介しあう活動を行い、本の世界に良いこだわりをもち、多面的な表現方法へ広げていく学習活動を意図的に組む。

初等部後期、中等部でも児童生徒の読書生活や自らの学びの姿勢を向上させていくために、本の世界の広がりを知ることや人とかわることで自らの思考を広げ、深めていく学習が必要である。

読書習慣を身につけるためには、まず読書量を確保しなければならない。そこで、中学1年では、フィンランドの国語教育メソッドを取り入れた読書記録をつけている。読んだ本の表紙画像を貼り付け、一言感想を書き留めるという方式である。本を読むたびに、表紙画像を貼る、読書記録が増えていくという生徒たちにとって楽しい作業が読書量の確保につながっている。また、その読書のきっかけとなる「読書案内」を生徒たちが作成することで、本の中にある世界を紹介し合える場となり、読書への関心

を高めることができると考えた。「読書案内」に、生徒の心にとまる表現や気に入った表現を用いることが工夫して自分の表現として取り込むきっかけとなることも期待できる。

本単元では中学1年という段階において、それぞれの学級の実態などもふまえ、個の読みを一旦、小集団の他へと伝え、意見交換、話し合いを通して読みを広げ、深めていくという、「学び合い」の場面を意図的に設定した展開とする。

第1次では、中学生になってからの読書記録をもとに、これまでに読んだ本はどのような傾向にあるのかを探ったり、読書によって得られるものの見方や考え方を探ったりして、自身の読書生活を振り返った。また、他者に紹介して、共有したい本や読み広げたい本はどれかを確認する作業を中心に行った。

第2次では、様々な読書案内の文章を参考に、他者へ紹介する価値があると判断した本を推薦し合い、グループでの話し合いを通して、紹介する本を一冊選んだ。選ばれた本の推薦者が、この本の紹介文の執筆を行い、グループで紹介する本の紹介文を推敲し、記事を完成させた。

第3次では、紹介記事のレイアウトを決める話し合いを行い、学級全体で作成する読書案内パンフレットの編集会議を行った。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	読書記録をまとめる	1 2	<ul style="list-style-type: none"> 読書をする。 読書生活に生かせる読書記録をとる。 読書の対象、本の分野を確認し、分類をする。 本の中の表現を適切に記録する。
2	本の紹介文を書く	3 4 5	<ul style="list-style-type: none"> 様々な読書案内を読む。 紹介記事にする本をグループ内で1人一冊ずつ推薦し合い、さらに、グループで一冊のパンフレットに載せたい本を選ぶ。 執筆者は、本の世界を効果的に表現できるよう工夫して、紹介文を書く。 編集者は、執筆者の推薦する本を読む。 紹介すべき場面を決め、「本からのメッセージ」として抜き書きをする文中の表現について確認する。 <p>◇他のグループの記事原稿を読み、本の主題が妥当かどうかを確認し合い、お互いの読み方について考えて、読みを発展させる。</p>
3	読書案内 ・パンフレットづくり	5 6	<ul style="list-style-type: none"> 記事のレイアウトを決め、清書する。 グループごとに仕上げた記事を持ち寄り、一冊のパンフレットにするための編集会議を行う。 <p>◇本の主題を適切に表しているかを考え合い、より分かりやすい表し方を見出し、決定する。</p>

3 授業の実際

(1) 学び合いが成立するために

学び合いが成立するために、それまでの準備の段階として、以下の2つの学習活動を設定した。

①個の読みを他へと伝える学習活動の設定 ～学び合いを通して育てる言語表現力～

個での学びの場面ととらえられることの多いであろう「読書」という活動を、他とかかわらせながら読み深めていく過程を踏むように単元を設定した。

まずは、個の読書活動、読書記録の整理に取り組み、グループのメンバーに対して、それぞれ一冊ずつ、互いに本を紹介し合い、その後、グループで推薦することにした一冊の本を読み、内容についての話し合いや本の紹介文の推敲などを行うという学習活動の流れである。

(i) プレゼンテーション ～推薦する一冊の本～

グループで紹介する本を選出するために、まず1人1冊ずつ紹介し合った。紹介するプレゼンテーションに必要な項目や特にアピールすると良いポイントとして準備する項目は以下のようにした。

- ・題名
- ・作者名
- ・この本の中で気になる文章表現
- ・作者が読者に伝えたいこと
- ・本のテーマ
- ・あらすじ
- ・楽しく読める場面
- ・感動する場面
- ・夢中になれる場面

すべての項目に触れる必要はないこととしたが、生徒の準備したプレゼンテーションのためのワークシートを読むと、ほとんどの生徒が紹介したい本のあらすじと作者（筆者）が読書に伝えたいであろうことについて詳しく話そうとしていることがうかがえた。また、実物が準備できる生徒については、その本を実際にグループ内で手に取り、開いて読みながら紹介し合うことを勧めた。

さらに、紹介する本を選ぶ際には、読書生活を広げていくための学習なので、できるだけ広い分野の本や自分らしい選書となるよう助言した。これはたつきかけによって、パンフレットに載せた際に広い分野のさまざまな本が紹介されることを想定し、推薦する一冊を選定できたグループもあったが、これまでの読書経験の浅さもあり、大きな広がりまでは望めないことも分かった。教師の推薦する本も何冊かパンフレットに掲載するなどの工夫の必要性も考え、後のパンフレットづくりの際には、教師の書いた本の紹介文も掲載することとした。

(ii) グループづくりの観点

ア 人数構成

グループの人数は3人を基本とした。この3人という人数構成は、このグループでこの後の話し合い活動や推敲、レイアウトを行うにあたって、できるだけスムーズに、かつ、グループ内のメンバー全員に常に何らかの役割をもって活動を進めていくことが望ましいと考えたからである。この単元のための座席表を作成し、国語学習の時間はこの座席表に従うこととした。

イ 読書傾向や人間関係

グループを構成するメンバーは読書の傾向が似通っているか、または逆に、全く違った読書傾向をもつ者同士で組んだ。これは、紹介文記事を執筆する生徒、グループで推薦する本を読んで、紹介文推敲の準備をする生徒と役割を分担するにあたって、本を読み進める速さの個人差を考慮する必要があると考えたからである。したがって男女比等は考慮していない。

②かかわり合いを学び合いに結びつける学習活動の設定

よりよいものの共通理解を図れることが学び合いに結びつけるために必要な場であると考え、モデル提示による確認と推敲の観点の確認を中心とする学習活動を設定した。

(i) モデルの提示

本を紹介するためのワークシートや紹介記事をグループで作っていく活動にあたっては、その都度、他のグループの作品（他クラスの作品も含め）の提示を何度も行った。他のグループの記事原稿を積極的に参考にして、よりよい記事づくりに生かすよう助言した。

また、金原瑞人・監修『12歳からの読書案内』（すばる舎）に掲載されている紹介記事を参考にし、どのような紹介文が、読み手に「この本を読みたい」と思わせるのかについて確認した。本の内容やあらすじを順番に説明するのではなく、もっとも魅力的な登場人物の様子や夢中になって読み進めることのできる場面を取り上げるこの効果が確認できた。また、本の分野によっては、あまり内容を詳

